

令和4年度 卒業証書・修了証書授与式

告辞

日一日と温かくなり春めいている津幡で本日、第54回卒業証書授与式並びに第22回修了証書授与式が無事挙行される運びとなりました。

195人の本科卒業生、28人の専攻科修了生のみなさん、おめでとう。

次のステップへ歩みだそうとする皆さんを、ご家族・関係者及び在校生とともに見送ることができることは、私たち石川工業高等専門学校に関わる全ての者にとって、大きな喜びであります。

そして、卒業生・修了生を長年にわたり励まし支えてこられたご家族・関係者の皆様には、心からお喜び申し上げるとともに、深く感謝いたします。

本日の卒業生の中には、マレーシアからの留学生アリフさん、モンゴルからの留学生トラガさん、ハトナさんがおられます。故郷を離れ、異なる文化、慣れない言語や気候など様々な困難のなかでも勉学に励まれ所定の課程を修めたことに、心からの賛辞を送ります。

中学校卒業後、同級生に先立ち高等教育機関である本校に入学した何年も前の自身の姿、思いを覚えているのでしょうか。実践的創造的な技術者となるための高度かつ専門的な学問、今ならその意味するところを理解し説明もできるでしょうが、当時の皆さんには期待半分、不安半分であったことと思います。あるいは、寮に入り家族ではない他人との初めての共同生活に、自由を感じつつ緊張もしていたことでしょう。そういった様々な思いとともに、皆さんの石川高専時代は始まったことと思います。

今日の日はどのように感じていますか。高度な知識を吸収するだけでなく様々な実験・実習・実技でその知識を実践し、あるいは、同世代とは言い難い幅広い年齢層の者とともに活動した5年間、7年間は、まだ実感していないかもしれませんが、高専でなければ経験できなかった貴重な糧となっているはずです。

入学当時そしてこの石川高専時代を振り返れば、それぞれの経験と成長に自信と誇りをもって、この春からの新たな第一歩を歩み出せるはずです。

しかし、皆さんの人生としてはこれからが本番であり、これからは一人の大人として社会の責任を負って生きることとなります。そしてその社会は、今まさに目まぐるしく変化し、複雑で険しいものとなっています。

情報化・グローバル化は全体的にはますます進展していくはずです。

例えば、Society5.0とかDXつまりデジタルトランスフォーメーションという言葉、皆さんが入学した頃にはまだまだ普及していなかったはずですが、今日では、社会が存立する基盤ともいべきものになりつつあります。むしろ皆さんは、この基盤の上に更なる次を生み出していくことが期待されるはずです。

一方、グローバル化については、ロシアのウクライナ侵攻、資源・エネルギー・食料の確保競争などにより、その実態は既に極めて複雑なものとなっています。場面や要素ごとに見ればむしろ逆行するように見える事象が多々発生しているようにも感じます。

製造業の国内回帰が顕著になっていますが、そのために必要なはずの資源、そしてなにより人口はそう容易く増加するわけもなく、では代替策はどうするかとなれば、世界中の公知の知識・技術を学び、先ほどのDXなども駆使して、新たな知識・技術を創造していくしか

ないのです。

皆さんが生きる時代は、誰も知らない変化が絶え間なく続く、皆さん自身で切り開いていくしかない時代です。しかし全ての世代がそれぞれに直面し、対応してきたことであり、皆さんにも当然、できるはずです。

もう一つ、皆さんの学生生活の大きな足かせとなったコロナ禍は、ようやく対策・制限の軽減の時を迎えますが、人々の感情や行動などに果たしてどのように影響したのか、これからどのように変化していくのか、これもまたわからないことです。

しかし社会は人と人との触れ合いで成り立つものであり、したがって社会に貢献する技術とは、人の思いを大切にこれと調和するものであるはずです。一個の技術者としてまた社会人として、忘れないでください。

本校は今年で創立58年。本科卒業生は皆さんの代で9000人を超えます。先輩方は国内外の様々な分野で活躍し、社会を担っており、それがまた皆さんに対する社会の期待に繋がっています。皆さんも、先輩方に続いてください。また、皆さんが人として自立していく成長の時を、同じ場で過ごし学びあった同士として、末永く付き合い、助け、刺激しあって、これからも進んでいってほしいと思います。

卒業生・修了生の皆さんは、それぞれの思いを胸に、今、石川高専から新たな社会へ歩みを進めます。これまで以上に、様々なことに悩み、翻弄されることも多くなるでしょうが、皆さんの中に未来を切り開く力は培われています。自信と誇りをもって、これからも一歩一歩思うように歩んでいかれることを祈念して、お祝いの言葉とします。

令和5年3月17日

石川工業高等専門学校長

嶋倉 剛